

衆生 1064 元 2055
菩薩 861

5,740^P - 1/2

神仏習合
元 1162^P

1052年 日本D史 読売(3)181
-798 宇佐 元 2034^P 宇佐神宮由緒に26^P
254年 秋 宇佐神宮由緒に26^P
5738-1/3

本地仏・垂迹身

それは、末法に入るとされる永承七年(一

〇五二)の約二五〇年前のことであつた。

桓武天皇の延暦十七年(七九八)宇佐

の八幡神が大菩薩(釈尊)になった。(「日

本の歴史」(3)読売新聞社、一八一頁。「宇佐

神宮由緒記」宇佐神宮庁、二六頁参照)

神仏習合が進み、八幡神が菩薩とされたこ

とで知られるように、この当時

「神は仏の垂迹」たもので、仏こそ日本の

神々の本地(衆生)浄土のために仮の姿をとつ

てあらわした垂迹身に對し、その真実身た

る仏・菩薩の姿をいうのである

と解釈されるようになった。釈迦はその垂迹だとい

う考え方から示唆された思想であり、これを

本地垂迹思想という。

こうして、この神はあの仏(菩薩)の化現で

あるというふうに限定されるようになり、例

神宮寺 元 1145^P
神仏石巻 元 1162^P

5751^P
5763^P
同文

5,740^P - 2/2

ほんし
本地
元 2055^P

ほんし
神示元 1142^P
神仏同体元 1162^P

あみた
元 61^P
衆生元 1064^P

大日如來^P
元 1344^P

は、奈良・平安初期に始まり、明治の神仏分
離によって衰えた、という。(「広辞苑」へ本
地参照)
また、神宮寺(神仏混淆のあらわれと
して神社に付属する置かぬ寺院)は、明治
維新以後廃絶、あるいは独立した。(「広辞
苑」へ神宮寺参照)

*

えは、
・天照大神の本地は、大日如來
・八幡神の本地は、阿彌陀如來(西方にある
極楽世界を主宰する仏陀の名)
などとする考えが育っていった。(「日本の
歴史」(3) 平家貴族、読売新聞社、一八頁参
照)
なお、本地の仏・菩薩が衆生を済度するた
め、迹を垂れて我が国の神祇となつて現わ
れたとする神仏同体説、つまり「本地垂迹説」
〔衆生を済い出す〕

H29(2017)11.10~14(8回)
H30(2018)11.29~11.30(2回)

5,741^P

おんとう
念頭に置く 元1734^P
おぼえていて心にかける

5751^P 弁財天は市井島姫命の
本地

なるほど、現代の我々の目から見れば、
雑だが、格別大きな意味はないうようにも
思えるが、この以後、
思想を念頭に置きながら、考察してゆ
きたい。

*

にとつては、かなり

社ジシ 伝デテ
ヤヤ シン
1ヤ7人 金箱のみか?

宇佐神社 上107°(田島)

④49797 沖島に市杵島 5,742 P1/3

⑤5752P ⑥49797 ⑦49797 ⑧25744-3/2 ⑨4992 ⑩5738-3/3 ⑪4992
⑫4992 ⑬4992 ⑭4992 ⑮4992 ⑯4992 ⑰4992 ⑱4992 ⑲4992 ⑳4992 ㉑4992 ㉒4992 ㉓4992 ㉔4992 ㉕4992 ㉖4992 ㉗4992 ㉘4992 ㉙4992 ㉚4992 ㉛4992 ㉜4992 ㉝4992 ㉞4992 ㉟4992 ㊱4992 ㊲4992 ㊳4992 ㊴4992 ㊵4992 ㊶4992 ㊷4992 ㊸4992 ㊹4992 ㊺4992 ㊻4992 ㊼4992 ㊽4992 ㊾4992 ㊿4992

最島神社

最島神社に關して、いくつかの伝説がある。
以下、写真四枚 820 第④図 最島(宮島)

参照

現在の最島神社の祭神は、市杵島姫命・田心姫命・瑞津姫命の三女神であり、福岡県玄海町宗像大社の祭神である三女神と全く同様である。
とニろが、宗像大社の伝説によると、

瑞津姫命は豊前の宇佐に、市杵島姫命は安芸に御遷座になつた。

という。(「伊都岐島」最島神社社務所、二頁参照)

つまり、安芸国へ最初に御遷座になつたのは、市杵島姫命。一柱だけだったのであろう。

其二

室町時代の末期ころ、最島神社の棚守職であつた棚守房頭が残した社伝には、この家

さかていり。

昔天照大神勅命曰、市杵島姫命西海

5,742^p - 2/3

↓ 黒い縦線を目立たなくして下さい。

・カラー
・空部分のよれを
トル。

↑カ
ット

右頁の上半分に
載せる。

・上・左・右に
大きくはみ出させ
下さい。



※ 右側部分を少し
右へずらし、
← 海上の板の線を
まっすぐにして下さい。



↓カ
ット

1309 1409 写真図版820 厳島神社 高舞台より大鳥居を望む (高舞台: 鎌倉時代 国宝)

『厳島神社』神社紀行(3) 学習研究社、2002年11月28日発行、8~9頁参照。 359^p

5,742 P 3/3

- ・カラー
- ・右頁の下半分に掲載下さい。
- ・下にはみ出させて下さい。
- ・海の色が、まだらになっています。
- 均質にして下さい。



七南七北
5786 P 11/17

13QG

14QG 第560図 厳島(宮島)

日本三景『宮島』広島県宮島町、昭和54年3月1日発行、52頁参照、360°

宮島大冊 45. 52^P
(4の上)

平野村字86^P
63^Pの図

伊都岐島¹
豊田86^P

5,743^P

おきな²⁸⁹
翁

はんろう¹⁸³
翁

「垂跡」とある

宮島大冊 10⁷
大冊 1,941^P

大和国から見て西海の竟か。いかー本来東
海と解すべきであらう。を申らせ給へと、豊
芦原の中津国にあまくだらせ給ひ。此の島を
御覧するに、神垂迹あらは永く繁昌すべき地
とおほしめす。ここに一人の翁あり是をめ
て、汝はいづくの者ぞと御尋ねありけしは、
こゝは所の者と答へ申す。云々
とある。(最良神社の冊子「宮島」広島県宮
島町、一〇頁参照)
・こうして、この翁が社殿を建て、市杵島姫
命を祭ったように解さる。
・そういえば、
(古名は伊都岐島)とは、音が極めて類似
ている。
③最良神社の伝説では、最初の御鎮座地は
(呉市と尾道市との間に位置する)豊田郡瀬
戸の田島で、同地の志加田原であり、ここか
ら同郡大崎島へ御遷りになり、奈加の村の加
牟の峯に御遷座された。

54

所と

小冊 238^P 地

H9.8.12(※)
H16.5.16(月)⑤

5,744^P

山林 118⁰
共 ぎヨウ

16リヤ
神處 1166^P
神のみこころ

かな 通う 437^P
七市 大冊子の52^P, 45^P
中の上

・ いかし、ここも御神處に（かな）通（な）わなかつたので、
更に安芸の島々を御巡行になり、佐伯郡大竹
浦（広島県西端の大竹市）に到り給ひ、そこ
から厳島を眺望され、ついに御鎮座地が
定まったという。（伊都岐島）厳島神社社務所、二・三頁参照）
④ 神武天皇は東征の途次、厳島に立ち寄つて
しばらく滞在されたが、この間、祭神と同殿
共床であつた。これは風波を避けるためと兵
員の休養等の為だつたと伝えてゐる。（「伊
都岐島」厳島神社社務所、三頁参照）
・ おそらく神武天皇（継体天皇）は、東方
の日辺日本国へ降つてゆかれ途中、厳島に
立ち寄つてしばらく滞在されたのであろう。
・ そんなに急ぐ旅でなかつたので、天皇は、
へしばらく御滞在になつたものと思われ。
・ 尚、その時すでに、この厳島に神社があ
つて、神（おろく、三女神のうちの一柱市
杵島姫命）が祭られており、
（神武天皇）（継体天皇）は、この祭神（市

55

小森 192⁰ 小森 540⁰
トイト
ヤウ

杵島姫命)と同殿共床されたの
あろう。

⑤ 先に述べたように、
厳島神社の社伝に、こ

う
記
文
水
て
い
3

人佐伯執職に、
宝殿廻廊を建立して、
嶺島大

明神を崇敬せよ
との託宣ありに
より、室

殿を建て神領を付す。時に推古天皇端正五年

癸丑十一月十二日なりと云へり

とある。
へ 日本社寺大観
上 名著刊行会、八

鳥神社
✓ 参照。
第六十八章
元号八月
法興元年
と
端

正
正
✓
の項に
おいて
既述

なお、端正五年は、推古元年癸丑（五九三）

に相当する。(既述)

その経緯をより詳しく述べる、次の通り

で
あ
る。

佐伯鞍職とよはれるこの島の神か、大野瀬

(二)

前頁20行

日本の伝説
「山陽」12

前頁20行

5,745^p-2/2

かいびやく 361^f

戸(安芸国佐伯郡大野と厳島との間の瀬戸)で漁をしていると、西の方から、紅の帆を揚げた船がやつてきた。
近づいてきた船の中から、
「おまえは何者か」という声加聞えた。
そこで、この島の神が、
「私は、佐伯岐の久良茂止と申しまして、開闢の時からこの島に居住する島の神です」と答えた。
すると、何と、
「汝の島を、私にくれないか」という言葉が返ってきた。
靴職があやしくよく見ると、船底に瑠璃の瓶を据え、瓶の中に赤い幣をつけた剣が立ってある。そして、剣を取り巻くように、三人の気品ある美女がいた。
その三人の様子はいかにも神々しく、
ても人間とは思えない。
佐伯靴職が、思わぬその場にひれ伏して、
「畏れ多いことです。仰せの通りにいたし

うかれ... 紀下172P
新(1)-182頁 ③ 3576-3/3
OK H12.1.8

④ 3576P
とよみみ 紀下155注21
推古2年2月10日
5,746P
⑤ 5748P 中

みろく 御璽
小林208P 大カマ 368P
昨くう 必くゆえる はない!
璽神社(みろくひ神社) 茂木五郎 小島 12P

10表参照)

まーよう
と申し上げると、そのうちの一人が
「実は、私はこの島に古くから居る者だが
今、御殿を造りたいと思う。私たちのために
百八十間の廻廊を持つ宮を造って祀りなさい。
そうすれば、必ずこの国を守ってあげよう
と仰せられた。
鞍職は、つつしんで問ひ返した。
「神様の御験を見せていただけますか」
女神は、答えてこうおっしゃった。
「難波の都の北東の方角に、ふしぎな光を
もった星が現われるでしょう。また、御殿の
内に鳥が神の枝を咥えて入るでしょう」
鞍職が急ぎ「東または西の都へ上つてみると、
女神の言葉通りの奇瑞が現われて、公卿たち
が大さわぎして、いるところだった。
なお、第六十九章人等与刀弥々大王の項
にあつて述べたように、推古二年(五九四)
二月一日に既戸豊聰耳皇子は東の日の出日本国
の天皇として即位されたのが本知なり。(第

南極星が現われると天下が安んずる
⑤ 5798°

とゆふのや 紀下

紀下 172° 10分
豊浦宮に即位

⑤ 5745° - 1/2 1142°
16分

5.747°

改行

前頁

HL

HL

● とすれば、^{うまやとのよとみみのみこ}既戸豊稔耳皇子は、この伝説が
いう推古元年十一月十二日前後の頃には未だ
即位しておられず、即位直前のこの当時
西の大倭国（肥後国）の推古天皇の都曰豊浦
宮の近傍にとどまっておられたように思われる
● あるいは鞍職は東方の近畿地方の難波へ
向ったのでなく、地理的に難
波に相当する所、大倭国（肥後国）タクマ
か原の豊浦宮へ上洛した、ということであっ
のだらうと思われる

なるほど、
難波の都の北東の方角に、ふいぎな光を
もった星が現われ、御殿の内に鳥が木の枝を
咋えて入る
● ということの真意は定かでない、単純に
へ難波の都の北東の方角に、突然明るい星
が出現し、地球が自転しているの、北西の方
角に移っていくように見えた
● ということなのかも知れない。
しかし、この物語では、次のようなことを

に解いてみたい。

ふくろく 鶴もくたかえ
南極星の化身とされる
あ5798+8
会社の名義
487P

小林 473P

5,748P

くちばし

嘴 632P

こと

あ5746
12~13P

電身も退す

大倭国（肥後国）のタクマが原の豊浦宮
からみて北東の方角に当る日辺日本国の天皇
として、等与刀弥々大王が即位された。それ
は、推古二年二月一日のことであつた。人々
は、都の北東の方角に、ふしぎな光をもつ
星が出現したように思い、大いに喜んだ。
ところから一方、萬機を等与刀弥々大王に委
ねられた推古天皇は、御殿の内へお入りにな
つて、政治から身をお退きになつた。
そこそこの
へ三本足の鳥（太陽）が神の枝を嘴で咥え
て（鳴）かないようになり、御殿の内へ入つた
という噂が立つた。
といふた意味であつたかも知れない。
●なお、「星」について参考次に述べると、
①「星使」は、天子の使者。勅使。（漢和辞典）
小林信明、小学館）
②「星軺」も同じく、天子の使者。（漢辞苑）
を示す。
●ここにいふ「星」は、萬機を委ねられた等
与刀弥々大王の事を指しているように思わ
れる。（後述）

小堀田は、あつた後

H9.8.12(火)

46.5.21(土)

5758 佐伯の子孫がいに
-2/2 18年 つてめた

5,749^P

七五七〇

ほうすい

祥瑞 元 1098^P

めでたい 吉

山陽12

こうした時、佐伯鞍職が進み出て、三女神
の御告げを帝（等与刀弥々全および推古天皇）
に申し上げると、帝はたいそう驚き、ただち
に田百八十町、杉山八千町を鞍職に賜わって
社殿や廻廊の造営をお命じになった。
■初代天照大神の生まれかわりとも考えらる
推古天皇の御代に、三女神の御告げが
あつたといふことは祥瑞とされたのであろう。
と推察される。
■安芸国へ引き返してきた佐伯鞍職は、新
三女神（最良の周囲の）
一、舟を造って女神と共に浦々々七浦をめぐり
ついに現在の地が神意にかなって、ここへ社
殿を建てた。この縁で、佐伯氏は末長く、最良
鳥神社の神職を勤めることになったという。
（「伊都岐島」最良神社社務所、三六頁。
「日本の伝説」(13)山陽、世界文化社、十一
十二頁。「日本社寺大観」神社編、名著刊行
会、四五一頁参照）

＊

5745^P
-2/2
1997

1167' ⑤5742' 750' 西海と守らせなまえ
 神霊 神のたま 2277 ⑤5742' 中央 ⑤5745' 1679 5.750' - 1/2

ほうかつ 2011' 包括 → つに合わせ7/めく子こ

遷(せん)が あったので、あろうと想像される。
 遙(はるか)かな昔(むかし)へ九州(きゅうしゅう)の銅剣・銅鉾(どうほ)文化圏(ぶんかきん)か、中
 国(ちゅうごく)や近畿(きんき)地方(ちほう)の銅鐸(どうだく)文化圏(ぶんかきん)を統合(とうごう)した当初(とうしゅ)の
 頃(ころ)から以降(いこう)、日(ひ)市(いち)杵(き)島(しま)姫(ひめ)命(みこと)は、安芸(あきの)の
 国(くに)の各地(おおくち)を点々(てんてん)とお遷(うつ)りになり、ついに「厳(いづみ)島(しま)
に御鎮座(ごちんざ)になった。」
 継体(けいてい)天皇(てんかう)は、東方(とうほう)へ下(くだ)ってゆかれる途中(とちゅう)、
 厳(いづみ)島(しま)に立ち寄(よ)って、しばらく滞在(たいざい)され、日(ひ)市(いち)杵(き)島(しま)姫(ひめ)命(みこと)と
 杵(き)島(しま)姫(ひめ)命(みこと)と同殿(どうでん)共床(きょうと)された。
 (端正(てんせい)五年(ごねん))
 推古(すいこ)元年(げんねん)、厳(いづみ)島(しま)の日(ひ)市(いち)杵(き)島(しま)姫(ひめ)命(みこと)は、九州(きゅうしゅう)
 の宗像(そうが)大社(だいしゃ)を訪(たづ)ね、
 田心(たしん)姫(ひめ)命(みこと)と端津(はつ)姫(ひめ)命(みこと)
 の二柱(ふたはしら)の神霊(かみたま)をお連れして、西(にし)の方(ほう)か

④5749¹⁴ 佐伯氏へつとある
ことになつた、といふ

とうとう

5,750^P-2/2

④5746^{左頁}
5749¹⁵

④5746^{同文}

ら、巖島へ歸つておいでになつた。

市杵島姫命は、

「実は、私はこの島に古くから居る者だが、

今、御殿を造りたいと思う。私たちのために

百八十間の廻廊を持つ宮を造つて祀りなさい

そうすれば、必ずこの国を守つてあげよう」

と、佐伯鞍職に仰せられた。

佐伯鞍職は、都へ上つて、三女神のお告げ

を帝に申し上げた。

「それは喜ばしい」

海中に浮かぶ

・ここに勅命によつて、百八十間の廻廊を

持つ壯大な海中に浮かぶ巖島神社が造られる

ことになつた。

佐伯氏の工夫・苦心は並大抵のもので、

かつた。いかいながら、華麗この上も

ない宮が、海の上に完成した。

こうして佐伯氏の末長く、巖島神社の神

職を勤めることになつた。子孫が

ということなのかも知れない。

次第

米

佐伯氏
「大坂年」パンフレット
「宇島」大冊36
佐伯氏
「宇島」大冊36
佐伯氏
「宇島」大冊36

「大坂年」パンフレット
「宇島」大冊36

なお
次頁

5,751^p

⑤5740^{p-2/2}
⑤5763
同文

百科 31-521^p
元 1026^p
日本 451^p

元 2055^p 奈良 平安初期以後
本地垂迹説

弁財天

我が国では、奈良。平安初期以後、

本地垂迹説が盛んになつて、市杵島姫命は

沙撈越羅龍王（婆羯羅龍王ともいう）の娘「弁

財天」とみなされた。

市杵島姫命は弁財天（梵天王の妃）

と習合され、ここに巖島神社は弁財天の社で

あるとみなされることになった。

本社寺大観し神社編、名著刊行会へ巖島神社

「世界大百科辞典」平凡社へ「マートン

い」や「竜王」。「神・仏の戸籍」らへ「脇

阪景城、文進堂、三〇三頁へ弁才天也。「玄

辞苑」へ本地垂迹説（等参照）

市杵島姫命と弁財天とが習合された当初の

よく知られている通り「巖島神社」

弁財天は江ノ島、竹生島、共に日本三弁天

と称され、有名である。の弁財天は

「空海、俗姓佐伯氏」が、平安初期の僧弘法大師

（空海、俗姓佐伯氏）が、唐からの帰途宮島に

立寄つて 5744¹⁴ 神仏分離 5740^{1/2}

5742^{1/3} 27頁から

5,752^P

立ち寄つて、自作の弁天様を厳島神社に御祀り

したという。

・その弁財天は、その後、厳島大明神とし

て厳島神社の主神とされ、明治初年

の神仏分離の際、厳島神社の西側に

隣接する「大願寺」の本尊として移された。

（「宮島」広島県宮島町、三六頁。「大願寺」

冊子参照）

なお、

へ現在の厳島神社の祭神は、市杵島姫命・

田心姫命・湍津姫命の三女神である。

という。（「広辞苑」へ厳島神社へ参照）

H9.8.12(火)
H6.5.22(日)⑥
H29(2017)11.11~14(8回) -

H30(2018)11.30(金)~11.30(2回)

H31(2019)4.30(木)~4.30(3回)

令和2(2020)4.13(日)~4.13(4回)

「伊都岐島」の地図を
18-3/3

5753P

大願寺・
波所

塔の図「宮島」大冊359の地図

「宮島」36P

本教マ

下7/3
7/13

*

冊子参照)

果宮島町、三六頁。五九頁の地図。「大願寺

間建立」と本堂のみを残す。「宮島」云島

巖島神社の西隣りへ移さ小、山門(元禄年

左大願寺のみ海中にそり立つ大鳥居の南

藍と称し、その中心が大願寺であった。現

多宝塔。境内にあった諸堂宇を含めて巖島伽

藍の麓にあった。五重塔、大経堂(千畳閣)

の麓の形をた。亀居山(塔の図)と呼という図

・大願寺は以前海中に立つ大鳥居の東側

僧了海により再建されたと伝えら小ている。

時代初期の建仁年間(一一〇一-一一〇三)の

・その創建などは詳らかでなく鎌倉

から、別名「弁財天本堂」とも呼ばれる。

であるが、巖島弁財天を奉安しているところ

大願寺の正式名は「亀居山放光院大願寺」

キーキヨさんぼうこういんだいがんじ

東側の

⑤5771^P 19^行 東中

(欠番 5754^P ~ 5762^P)

改訂 5,763^P 1/2

5766^P 3/4

5740^P 3/2

5751^P 1/4

竹生島 (弁財天の島)

先にすてに述べたように、奈良・平安初

期以後、日本地垂説山が盛んになつて

最島神社では、市杵島姫 (瀛津島姫) が弁財

天と習合された。

近江国には、壬申乱

延喜式内社に相当する神社、八幡山の麓の

大島神社、(「滋賀県の歴史散

歩」(下)山川出版社、一九九二年三月、二刷発行、三頁参照)

(2) 「中つ宮」に相当する、奥津島神社、

(3) 「沖つ宮」に相当する、奥津島神社、

が、あつたのであろう。現在、奥津島神社は、

近江琵琶湖の沖ノ島は、あまりに

も湖岸に近すぎる。(第423回「周行天下」、第581回「沖ノ島」参照)

「玄海灘」の真只中にポツンと浮かぶ筑前国の

沖ノ島を想わせる小島はないか。

あつた人々の目にとまつたのか、竹生島

(都久夫須麻)であつたのであろうか。

玄海灘の沖に浮かぶ

ちやうど 1463P
著名 名がよて知られてゐる
こと

ふたば
礼所 云 1945P
5755P

紙小 485の表
朝日 559.5.19
朝日 368
朝日 559.5.19
朝日 625P

5,763P-2/2

日本社 675頁
朝日 559.5.19付
日本社 等には無い

日本社 675頁

81

ノ島は、近江国の琵琶湖北端近くに浮かぶ竹生島に相当すると考えられるようになったのか
も知れない。(写真図版 821) 竹生島参照

竹生島の弁財天は、厳金山宝厳寺に鎮まつ

ており、俗に竹生島観音の名を以って聞え、
厳島・江の島の弁財天と並ぶ日本三弁天と

の一つと称せられている(写真図版 822) 大弁才天坐像参照

大弁財天女は、天照大神の分魂である

と伝えられている。(朝日新聞) 昭和五十九年

五月十九日八弁天さん(参照)

寺伝によると、

「聖武天皇の神亀元年(七二四)行基が

聖武天皇の勅命を奉じて開創した。その折、行

基自ら弁天像を彫ったという。聖武天皇の天

平十年(七三八)、四天王像を安置して、国

家の鎮護となす。そして桓武天皇の延暦年間

に最澄が、桓武天皇の勅を奉じて此處に弁

財天を祀った。云々」

と四月二十日発行(日本社寺大観)寺院編、名著刊行会「昭和四十五
年四月二十日発行(六二五頁)宝厳寺参照」

44/17
下311

右頁の右下(女頭)に掲載下311

③ 3.33
④ 125(2013)6.44
⑤ 125(2013)6.44
⑥ 125(2013)6.44

横線より
T11
奥津島神社
です。
又字の全に4

5764^P - 1/3

→ 5766
11-2/4
幡山崎

中333
1404

1304

第561図 近江奥島荘付近図

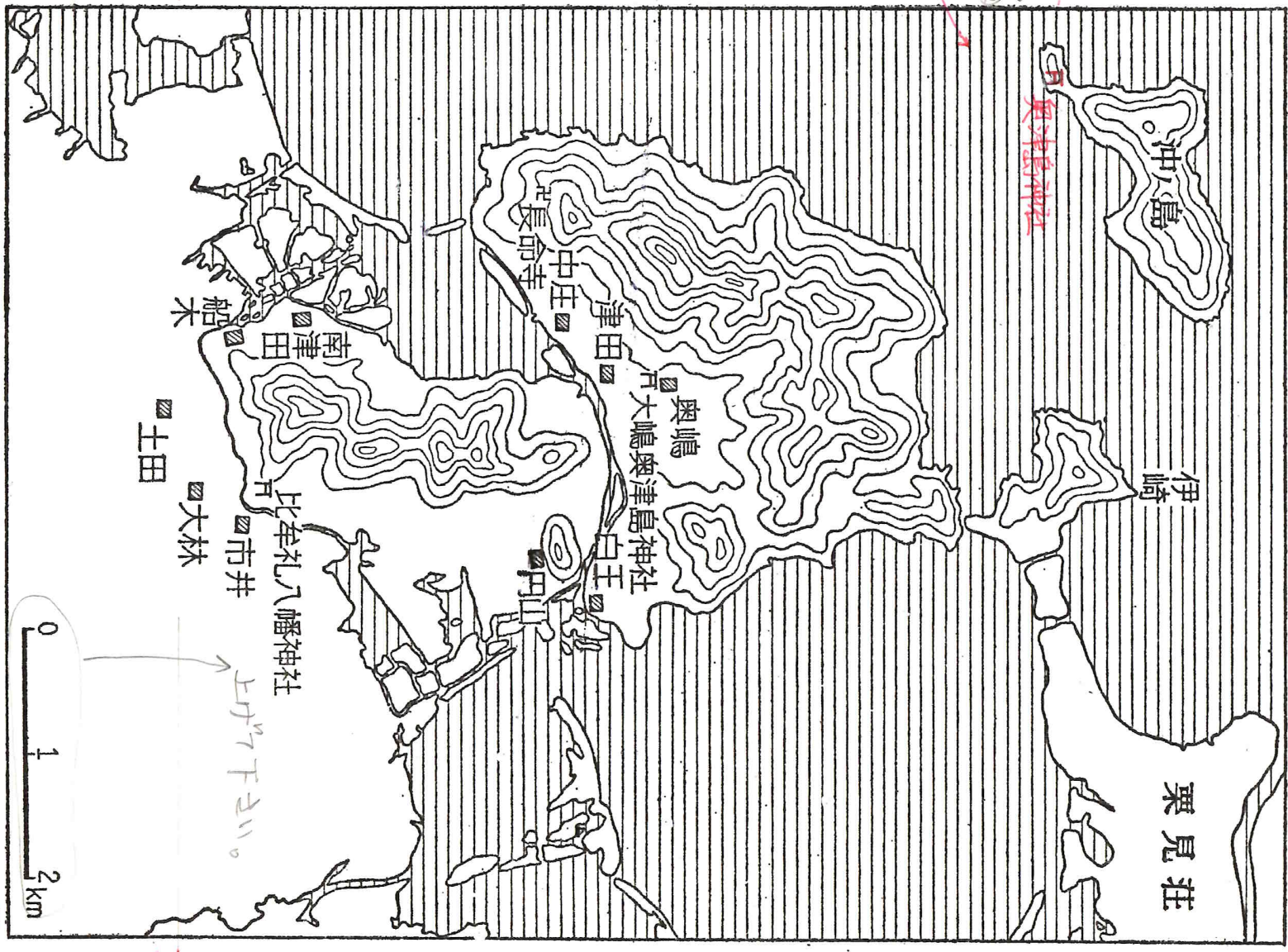
1204

湖岸線は大正年代のもの

右へ入移和

『中世祭祀組織の研究』増補版、萩原龍夫、吉川弘文館、233頁参照。

10 地



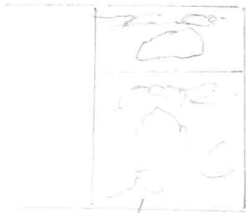
5,764P-2/3

・カラー

・右頁の上 1/3 ↑

・左右に
はみ出して
掲載下さい。

ヨコレ
トル
・空と海の 美しい
ヨコレ もとめておいて下さい。



前頁の地図

竹生島の千手観音は
由 5768P-9/3



カット
↑

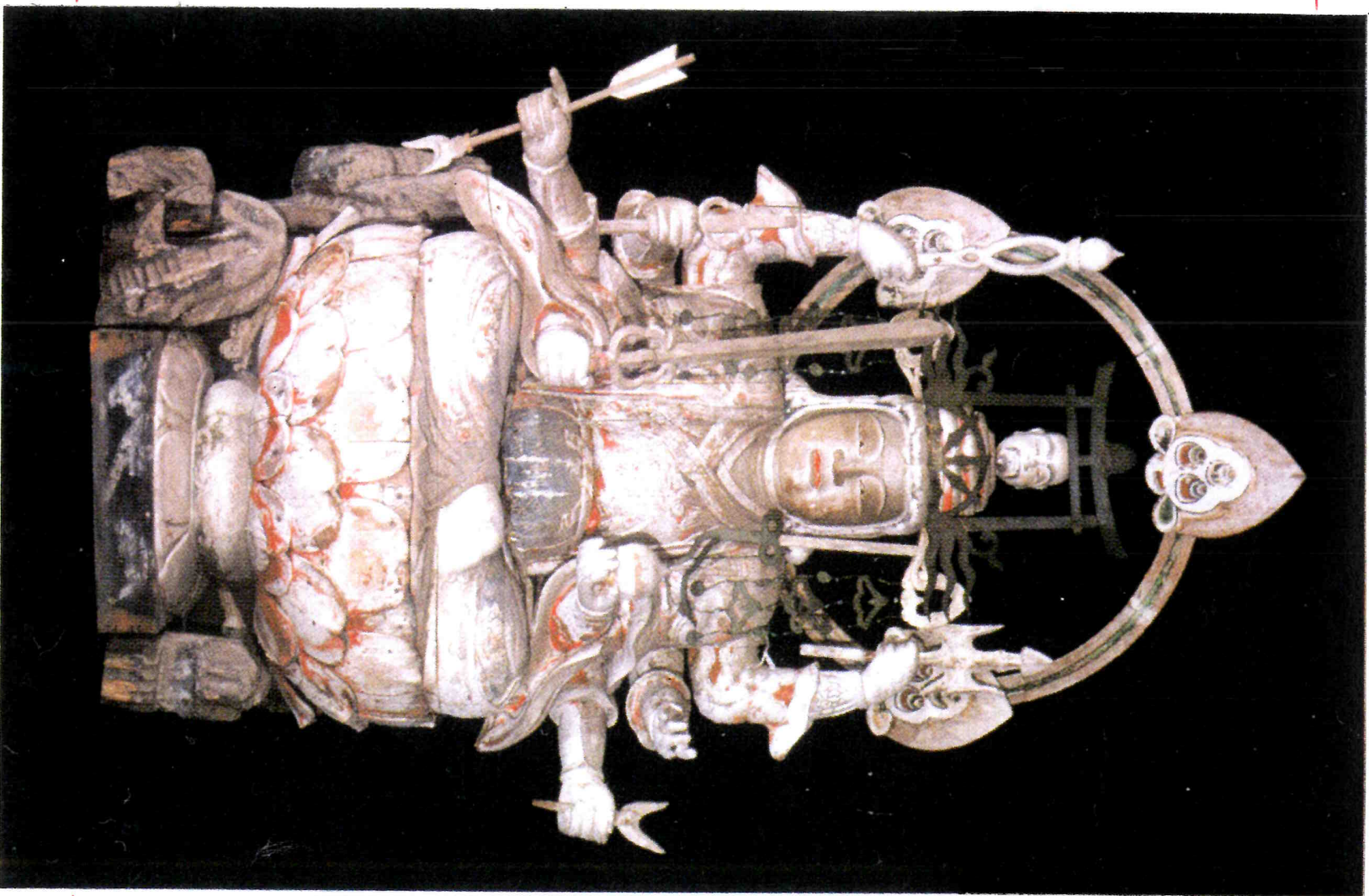
写真図版 821 琵琶湖に浮かぶ^{ちくぶ(ま)}竹生島

『朝日新聞』令和元年(2019)5月25日午前、本社へりから遠藤真梨氏撮影。

・古くから、「神の島」と信仰を集めてきた。 377

左頁右の4頁に大主と掲載下さい。

378



1499

022 022

木造大并才天坐像(お創立)¹¹⁰⁴室町時代 像高145.0cm

右へ
移動

1309 5724 6615

近江若狭の肖像 吉田さらさ「JTBパブリッシング」平成24年1月末以降出版 104頁参照
126頁参照

本尊は60年に1度だけ開帳される秋仏だから、お前立ちは10で7も拜める。

日本社 625P
日本社 368P

sp. 65764P

5,765P

また、とりわけ有名なのは、謡曲「竹生島」である。

135
時は平安、醍醐帝の御世。都から一人の臣下が竹生島参りのために漁舟に乗った。

舟にはすなどりの翁と若い女がいた。真に着き祈りをささげると、女は「自分は何

間ではない」といつて社殿に入り、翁は「自分はこの湖の主である」と波の中へ。やがて

神殿鳴動し、弁天、現れて舞をまう。湖上にも電神、姿をみせ、男に金銀珠玉を授けて消

えていった。

という。(「日本社寺大観」寺院編、名著刊行会、六二五頁へ宝厳寺)。朝日新聞に昭

和五十九年五月十九日付へ弁天さん。謡曲「竹生島」参照)

なお、弁財天を祀っている竹生島の宝厳寺は、西国三十三所第三十番の札所として

広く知られてゐる。

*

57 68-3/4
未行
57

大田 1363 持仏堂 云 1060 P

5,766^P - 1/4

元 2326¹

いかニ
伊奈郡 八土記 4-7
地名 30 向高平地 20 反大 西栗井

新羅 263
①5754 孤島 72813

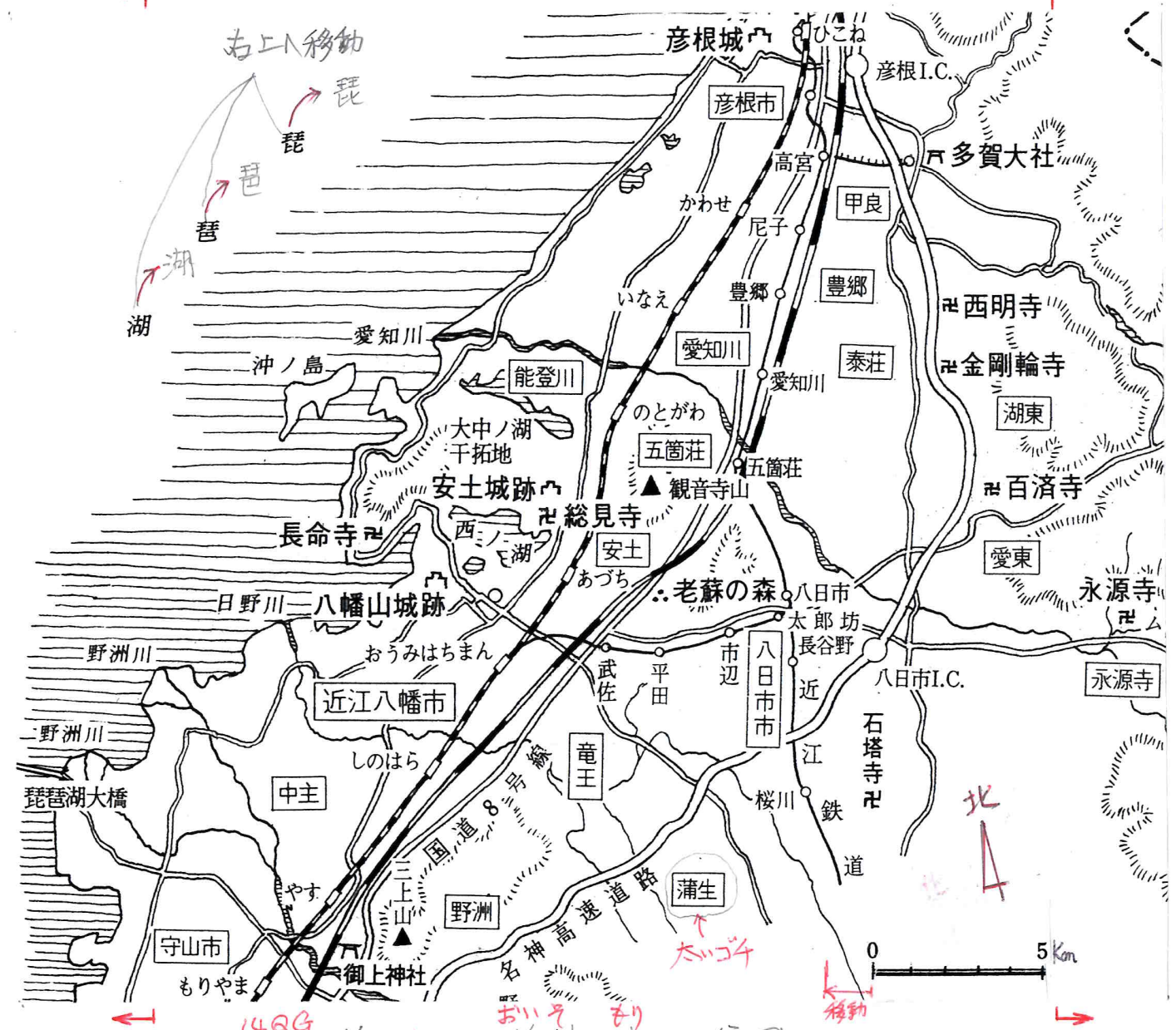
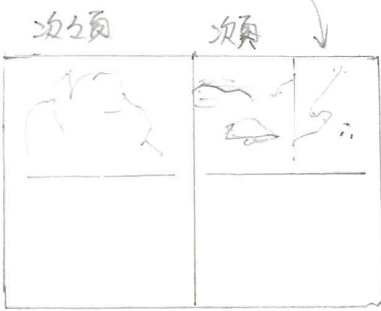
盧秘抄 卷第二には、
 近江におかしき歌枕、老會轟、蒲生野布施
 の池、安吉の橋、伊香具野余呉の湖の滋賀
 の浦に、新羅が立てたり―持佛堂の金の柱
 と記されてゐる。第563回へ後白河法皇参照
 ①「老蘇」は蒲生郡の村で、老蘇の森は和歌
 の名所として轟き知られる。第562回へ「帝国地名辞
 典」太田爲三郎、名著出版、へ「老蘇」参照
 ②また、蒲生の「布施山」の麓に、「布施」
 の溜りがある。「滋賀県の歴史散歩」(上)滋賀

玄海灘の只中の孤島に沖ノ島にの北方には
 新羅国に（九三五）がある。
 そこの近江国の竹生島を沖ノ島に見
 た人々は、竹生島に北方の伊香郡
 （余呉湖あたり）や西浅井郡（明治二十九年
 廃して、伊香郡に合わせた）を、新羅国に
 見立てたのかも知れない。
 後白河法皇（一一二七一一一九二）編著「梁

写真図版
823

5,766^P-2/4

右頁の右上に
大きくはみだり
掲載下さい。



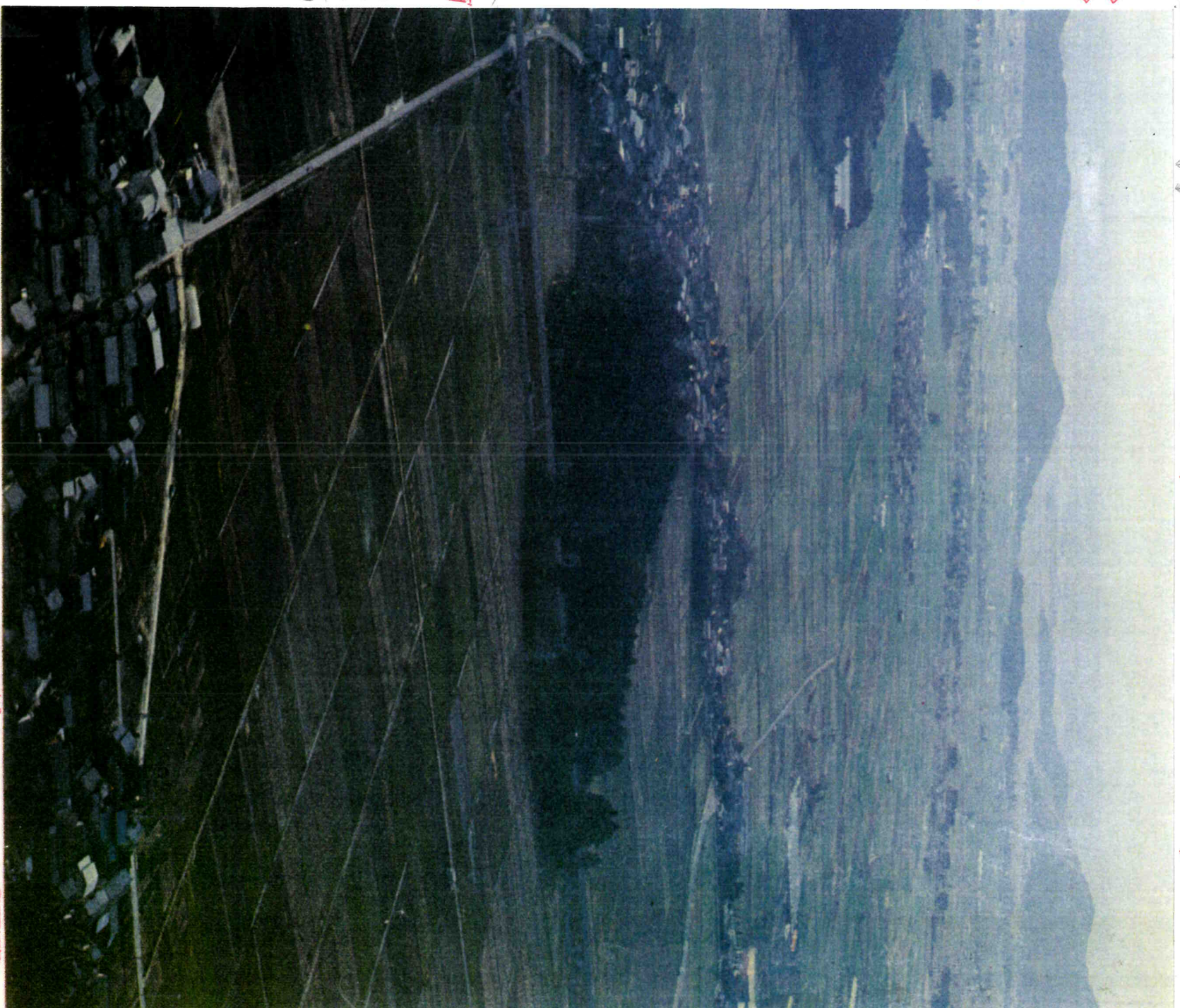
14Q 第562図 老蘇の森近傍図

13Q 『近江路』歴史とみどころ 邦光史郎・木本義一 保育社 昭和62年12月1日重版発行 120頁参照 381

・カラー
 ・右側の左上(4頁)
 上・左へ大まかにはみ出して掲載下さい

＊暗くならぬようにお願いします。
 「遠く山々を消えないうちに」
 ↓空を、きれいにしておいて下さい。

球の白い線がトビ 382P



5,766P 3/4

トビ、適宜カットして下さい。

14.09 写真図版 823 鬱蒼^{ふさふさ}と樹木^きが茂る^も (老蘇^{らうそ}の森^{のもり}がゴッ

13.09 「カラ近江路の魅力・坤^{あま}」 中村直勝^{なかつらちか}の本建三^{ほんけんさん}、淡交社、昭和62年7月13日5枚発行、105〜108頁参照。
 13.09 「老蘇^{らうそ}森」は、「古今集」以来の歌歌であり「名所だ」た。近年^{ここ}、昔^{むかし}の1部の10分の1もない。という

・カ-
・左頁上半分に
大主
載せ
下さい。

5,766^P - 4/4

カ
↑



↑

1429 第563図 後白河法皇 (1127~1192)

1299 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵

1329 『写真と絵でわかる日本の合戦』加唐亜紀 (せいとうき) 西東社、2014年11月10日発行、21頁参照。
1299 二条天皇に譲位後、5代34年にわたって院政を執る。今様を好んで「梁塵秘抄」を編纂した。

5766-1/4 1349

5,767-1/2

5766-1/4 湖南アルプスなどという。

県高等学校歴史散歩研究会、山川出版社、一
九三頁参照)

●「安吉の橋」は、定かでないがあるいは
「安土口の橋」を小意気にもじったものなの
かも知れない。

●ともあれ、琵琶湖南岸の蒲生一帯の地と、
琵琶湖北端域の余呉の湖の滋賀の浦と
が、対比して述べられているように思われる。

●あえて述べる、
言わすもかなることながら

「伊香具野余呉の湖の滋賀の浦に、新羅が
立てたり持佛堂の金の柱
とは、次のような意味なのであろうと想像さ
れる。

〔竹生島を沖ノ島に見立てると、琵琶湖北
岸の伊香具野余呉の湖の滋賀の浦は新羅
国に相当する〕

琵琶湖南岸に、宗像神社に相当する三女神
を祭る神社があるのだから、一竹生島の
北方の琵琶湖北岸には、当然、日鉾が立て

H9.8.13(日)
H6.S.28(土)⑥
↑

地%54↑

5,767^P-2/2

11日 5766²/₃
紀上334^P 中史

金 2033^P 513^P ✓
小林^P 1010⁺

られていてしかるべきである。
ところか何と、伊香具野余呉の湖の滋賀
の村に、持仏堂(持仏、または位牌を安置
する堂)を建てた新羅の人々は、そこに金
の銚(は)でなく、金の柱を立てた。
似ていないでもないところか、おかしいで
はないか。
人々は、大いに面白かったものと思われる。
滋賀県 八日市市の西方二キロには、金柱
宮跡(みやあと)があつて、梁塵秘抄の「金の柱
と結びつけて考えられているようである。
(「滋賀県の歴史散歩」(上)一九二頁参照)
●この当時、金の柱を立てることは、新
羅から渡来した人々の風習だったのだらうか

*

H9.8.13(水)
→ H1.10.20(土)

① 2561 ② 2559

5.768 P-1/4
かんきょえ 165 神奥 1165 頭人 から あき 1576
日本社寺 625
かんきょえ 1144 かんきょえ 916

③ 5763 ④ 5764
- 3/2 579

も知れない。

(*)

今かりに
心信す

と述べた。その時の様子を再現する儀式と
して、この蓮華会がとり行なわれていたのか
も知れない。

市杵島姫尊は新羅王を帰順させ、その後船で
沖ノ島へ還御されたのであろう。

第四十三章「宗像神社」の項において、
「その昔、辛卯年（三三一）に、」

名著刊行会、へ宝蔵寺（参照）

え、船にて還御する例であつたが、今は廃絶
されてゐる。

というのである。（「日本社寺大観」寺院編）

井郡の胡岸の地に到り、神供を参詣人に与
え、十五日神輿に其像を乗せて早崎（東浅
より、弁天の像を其家に遷す。こ小を旅所と
さし）を定めておき、半年後の六月一日
先づ正月、浅井郡内に頭人（かしら、あ
な）をつけていた。

る寺）では、往古、蓮華会という儀式を行
なつていた。

竹生島の宝蔵寺（弁財天を祀る）

← この夏末 とり行なわれて

な	お
---	---

・ かつて、
竹生島は、
下
神仏習合の聖地であう

明治初年の神仏分離令により、京都府

久須麻神社
と
宝嚴寺
と
に分けられ

① トル
宝敷寺の
本尊曰大弁才天
は
六〇年に一度だけ開帳される
か
お前

立ちはいっで、お拝める。近江若狭の仏像

吉田さうさ
J
T
B
ハ
フ
リ
ッ
シ
ン
グ
平成二

十四年一月ころ出版
一〇四二五頁参照

明治維新神仏分離の際、
本殿を京都・久夫須麻

觀（寺院編）藤本弘三郎「名著刊行会」昭和

参照

H29(2017)11.15(火)~18(木)
H31(2019)4.30(火)~4.30(水)

5,768^P-3/4

F4/30
4/30

○頁解説参照

昭和五十五年七月二十三日発行 下 No. 28 一 二

（「竹生島宝蔵寺」陳舜臣・峰寛海「淡文社」

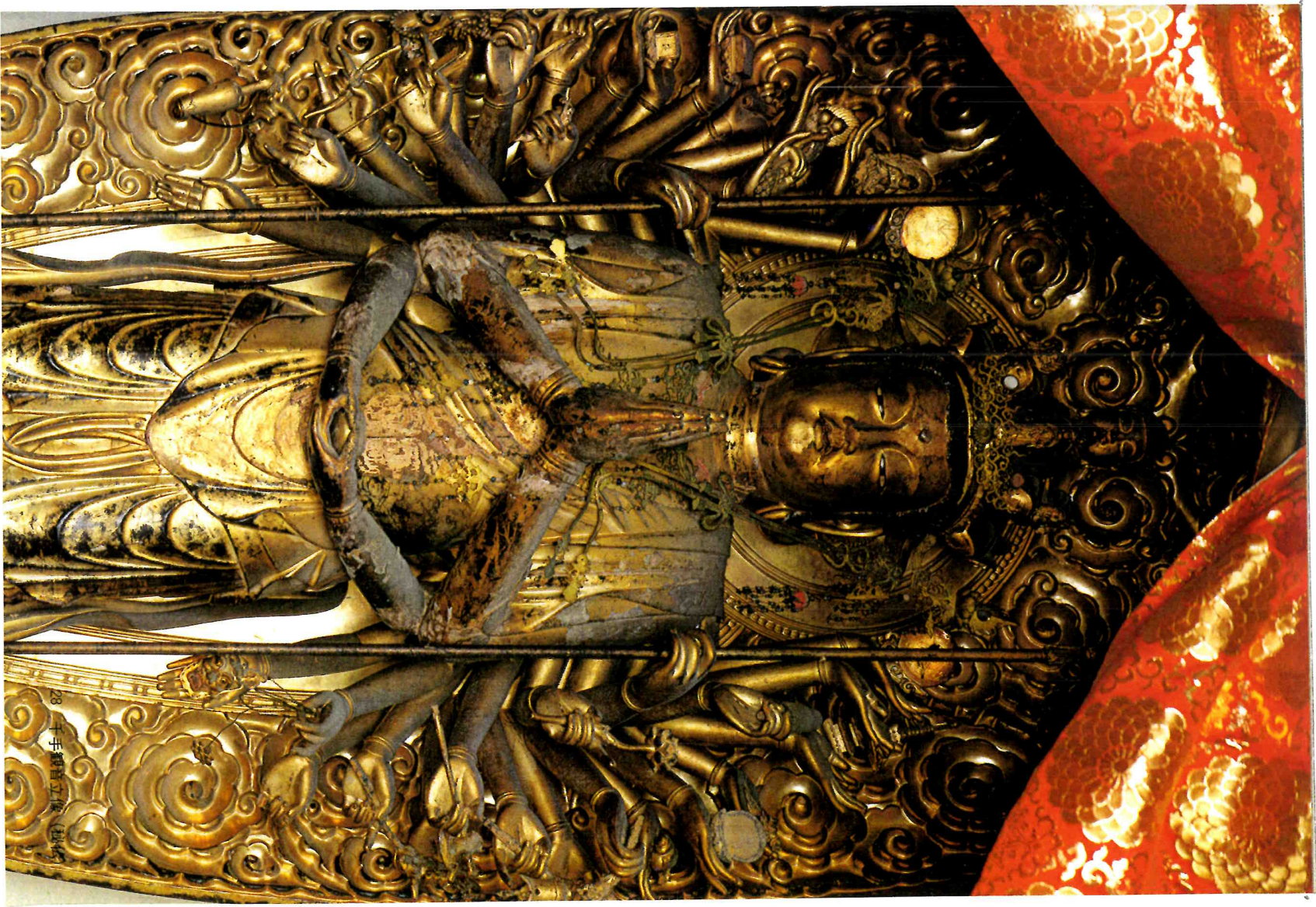
杜所と「有」有名で「参詣」の「人」が「絶え」ない

(X)

・カラー
 ・裏の全面に、
 はみだり
 大玉
 掲載下さい。

495 1

5.768^p - 4/4



1304

竹生島宝蔵寺 陳舜臣・波文社 昭和55年7月23日発行 No.28 参照

1404

写真図版 824 千手観音立像

峰寛三

竹生島全景の写真は、⑤5764^p-7₃

389